

I 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

情報メディア教育研究センターでは、これまで高く評価されてきた、組織全体として定量的達成指標を徹底して提示する姿勢を継続し、定期的な自己点検を行う委員会体制が効果的に機能し、高い水準のプロジェクト活動を維持している。そのことは特筆に値する。

時代が要請する、情報教育の重要性に応じた教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、科研費を獲得した研究活動によって適切に実行されており、2015年度大学評価委員会による評価結果への対応は、充分になされている状況だと認められる。今後もますますそうした取り組みが充実し、その成果が適切に社会に還元されていくことが期待される。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

高い評価をいただいた自己評価の仕組みと達成度の数値化による管理方法を2016年度も継続し、所長、副所長、3名の専任教員からなる所員会議による3ヶ月毎の自己点検および運営委員会による半年毎の自己点検を行った。結果として期首に計画した2016年度のプロジェクト活動は96%を達成した。(添付「2016年度自己点検(情報メディア教育研究センター)_期末」資料参照)

教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、主として専任教員が獲得した科研費により継続した。教育支援では反転学習などビデオを利用した授業が36科目、21名の教員によって行われ、モバイル端末を活用したアクティブラーニングは経済学部や理工学部に展開した。また、研究面では本学の授業支援システムの開発母体である国際的な Sakai コミュニティでの活動に加え、教育システムの標準化を担う国際組織である IMS に新たに加盟し、米国で開催されたカンファレンスでの発表、開発者を招聘したカンファレンスを行った。これらの成果は国内外の学会への論文投稿、センター主催のシンポジウム、および Web サイトでの公開を通じて社会還元を行った。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

情報メディア教育研究センター所員会議による3か月ごとの自己点検および運営委員会による半年ごとの自己点検は大変優れた取り組みである。教育・研究の多様化・グローバル化の取り組みも行っており、教育支援でもビデオを用いた授業やモバイル端末を活用したアクティブラーニングが行われている。研究面でもカンファレンス発表やシンポジウム、国内外の学会への論文投稿が行われており、研究成果の社会還元という点で大変優れている。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2016年度の現状

1.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。 はい いいえ

【2016年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- 所長、副所長、専任教員3名から構成される所員会議は10回開催された。うち、初回の会議では年間の活動計画を合意し、その後3ヶ月毎に自己点検レビューを4回行った。
- 運営委員会は5回開催され、うち期首(5/13)、期中(10/11)、期末(3/15)は自己点検レビューを行った。
- 3月に主催したシンポジウムは学外への研究成果報告を通じた研究の質保証という役割を含んでいる。
- 2016年度の詳細な自己点検結果については、別紙「2016年度自己点検(情報メディア教育研究センター)_期末.pdf」に示す。なお、本資料は2014-2016年度の中期計画の結果を一覧することもでき、網掛けしたプロジェクトは2014および2015年度に完了している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> • 本研究センターでは中期計画年度を2014-2016年度としており、2016年度は最終年度にあたるため3年間の総括も合わせて行った。 	2014-2016 中期計画全般

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

情報メディア教育研究センターの質保証活動については、所員会議で3か月ごとに自己点検レビューを4回行い、運営委員会では5回の開催中3回で自己点検レビューを行っており適切に活動している。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

- ・ IMS ワークショップ(2016年8月25日、市ヶ谷キャンパス、国際的な e-Learning 技術標準を策定する IMS GLC が展開する事業の日本国内での普及、9名の発表者による8件の報告、参加者 60名)
- ・ 情報メディア教育研究センターシンポジウム(2017年3月1日、市ヶ谷キャンパス、ITを活用した新たな教育方法の実践、5名の発表者による5件の報告、参加者 77名)
- ・ 情報メディア教育研究センター研究プロジェクト (23プロジェクト)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ http://www.media.hosei.ac.jp/imsworkshop_2016/
- ・ <http://www.media.hosei.ac.jp/symp2017/>
- ・ http://www.media.hosei.ac.jp/research/project_2016/

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

- ・ 情報メディア教育研究センター研究報告(Vol. 30、2016 ISSN 1882-7594) (6件)
- ・ 公表論文は多数になるため根拠資料を参照 (29件)

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ <http://www.media.hosei.ac.jp/vol30/>
- ・ http://www.media.hosei.ac.jp/research/paper_2016/

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。

- ・ 情報メディア教育研究センターWeb サイト ページビュー数：67,964。ダウンロード数の多かったコンテンツの TOP10 を下表に示す。

	種別	タイトル	発行年	ダウンロード
1	研究報告	岡野裕征他、共鳴型サイレンサの高性能化に関する研究	2006	838
2	講演資料	中島尚正、国際社会で活躍できる人材の育成と課題	2012	484
3	研究報告	近藤淳史、片岡洋右、分子軌道法による化学反応の解析	2000	435
4	研究報告	岩原光男他、ステッピングモータの低騒音化	2010	427
5	その他	ARCS モデルに基づいた授業チェックシート	2014	400
6	講演資料	藤井聡一郎、LTI を用いたプログラミング学習支援システムの開発	2015	342
7	講演資料	常盤祐司、法政大学版 YouTube - OATube	2016	331
8	講演資料	宮崎誠、eポートフォリオシステム評価 - Mahara と Sakai OSP -	2011	326
9	講演資料	田村晶子、飯野厚、ゼミ募集における ePortfolio システムの活用と展開	2015	311
10	研究報告	栗原祥吾他、ステッピングモータの低騒音化	2007	253

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 情報メディア教育研究センターWeb サイト 2016 年度アクセスログ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400字程度まで）※2016年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

学外の有識者による外部評価は実現できていないが、所長、副所長、3名の専任教員といったセンター内部の教員が所員会議を毎月開催し、研究活動に関してPlan、Do、Actionを行い、センター外部の教員が6名含まれる運営委員会がその研究活動を年2回の自己点検プロセスとしてCheckすることによって、運営委員会が第三者評価機関と同等の役割を果たしている。また、年度末に開催された本センター主催のシンポジウムを通じて本センターの研究結果が学外の参加者に報告されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度中期目標・年度目標達成状況報告書に添付した2016年度自己点検

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2016年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

- ・採択を受けた科研費：基盤(C) 2件（1,000千円、400千円）
- ・応募した科研費：基盤(B) 1件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・平成28年度科研費交付申請書

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
2015年度の【この基準の大学評価】として「総じて、研究活動と成果発表は充実していると言えるが、それに対する社会的評価が研究報告の総ページビュー数だけでは十分に把握できないのでページビュー数の多かった研究報告を分析するなどの手法の検討が望まれる。」というご指摘をいただいた。そのため、専用の分析ツールを用いてページビュー数以外の2016年度データを分析し、③に結果を示した。それによると研究報告の他、シンポジウムの講演資料などについてもダウンロードされており、トップは10年以上も前の論文であった。これよりWebサイトには、多様な研究成果や発表資料を長年にわたって公開する重要性を認識でき、今後、より多くの研究成果を公開していきたい。	対外的に発表した研究成果

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

【この基準の大学評価】

研究・教育活動実績についてはIMSワークショップ、情報メディア教育研究センターシンポジウムが開催され、23件の研究プロジェクトも進行していることは高く評価できる。対外的に発表した研究成果については情報メディア教育研究センター研究報告が6件と公表論文が29件であるが、前年度と比較して減少していることは懸念材料である。研究成果に対する社会的評価をWebサイトのページビュー数のみならず、コンテンツのダウンロード数で評価したことは特筆に値する。今後もより多くの研究成果を公開し、研究成果の社会への還元を促進していただきたい。第三者評価についてはセンター内部の教員による自己点検のみとなり、学外や学内の他組織による外部評価システムの導入の検討が望まれる。科研費の獲得状況については昨年度の3件から基盤(C)のみの2件となり、減少していることは懸念材料である。

III 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

該当なし

【大学評価総評】

情報メディア教育研究センターは3か月ごとの自己点検や運営委員会による半年ごとの自己点検により、研究センターとして定量的な達成指標が確立しており、2016年度では96%のプロジェクト活動が達成されたことから、高い水準でのプロジェクト活動が維持されていることは特筆に値する。さらに、研究成果に対する社会的評価に関しては、新たにコンテンツのダウンロード数を指標に用いる等の積極的な評価方法の確立がうかがえ、高く評価できる。今後は内部質保証にとどまらず、第三者評価等の外部組織からの評価についても検討が望まれる。

研究報告や公表論文、科研費の獲得状況については、前年度と比較して減少しており、研究成果を求められる研究センターとしては残念な結果である。今後の科研費の獲得および研究成果の充実および成果の社会への還元が適切に行われていくことが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。